

## 放射線汚染地域に住む病気の子どものための特別保養

2015年8月 ベラルーシ

■場所：子どもリハビリ・健康回復センター「ナデジダ（希望）」 ミンスク州ビレイカ地区

■期間：2015年8月3日～8月26日

■参加者：子ども34人（8～17歳／ゴメリ市、レチツァ市、ブラーギン市、モーズィリ市、ジロービン市、及び周辺の村）、引率者2人。

昨年まではゴメリからバスで直接ナデジダに行きましたが、今回初めて列車でミンスクに、そこからナデジダまでバスで移動しました（子ども基金の資金難によるものです）。往路、ゴメリの団体の代表者もナデジダまで引率しました。駅では列車からバスまで子どもたちの荷物を運ぶのをナデジダの職員が手伝いました。

参加者のほとんどは、これまでに何度かナデジダに来たことがあり、初めて参加したのは7人でした（日本の里親から支援を受けている子どもも多く参加）。初めての子もすぐに友だちができ、ナデジダの生活に溶け込みました。引率者、ナデジダのスタッフ、心理カウンセラーたちは、子どもたちの生活全般に気を配り、子どもたちは安心してのびのびと過ごすことができました。大きい子たちは自ら小さい子たちの面倒をみました。8歳、9歳の小さな女の子たちが抱きつかれ、背の高い17歳の男の子は「僕にはもうこんな大きな子どもができちゃったよ」と笑っていました。消灯前、小さい子どもたちの部屋で絵本を読んであげている年長の女の子もいました。

医師による診察は、到着後、保養の中ほど、保養の最後の3回行われます。最初の検診でそれぞれの治療が決められ、途中でその効果を確認し、その先の治療を決めます。最後の健診結果は持ち帰り、親や地元の病院の医師に伝えられるようになっています。午前中はそれぞれの治療、午後はクラブ活動（陶芸、絵画、手芸、木工細工、音楽など）に通ったり、保養所全体の催し物（コンサート、ゲーム、コンクール、スポーツ大会）などに参加します。子ども基金スタッフによる書道教室・くみひも教室も行われました。3食の他に軽食（果物、ジュース、ヨーグルトなど）が3回あります。夜は映画観賞とディスコ（体育館で音楽を流し小さい子から大きい子まで一緒に踊ります）が交互に行われます。

保養中、ミンスク市の小児がんセンターへ定期検査に行く子が2人いました。グループの引率者が同行し、ナデジダの車で往復しました。病院では子どもの両親



が前もって来ていて、診察の順番をとっていたおかげで、待ち時間は短くてすんだといえます。幸いなことに検査の結果は異常なしでした。

<副所長・小児科医：イレーナ・N>

毎年このプロジェクトに参加している子どもも多く、彼らの成長する姿を見られるのは個人的にもとてもうれしい。彼らは同時期に滞在していた他のグループの子たちと違い、みんな深刻な病気を抱えているにも関わらず、どのグループより結束しとても積極的にいろいろな催しに参加し、ほとんど1位か2位をとった。その前向きな姿勢は大変素晴らしい。<以降はイレーナの説明。括弧内は保養中に受けた治療。>

●クリスチーナ：足のむくみがある。免疫力の低下はリンパ腺にも影響を及ぼしているのではないかと。（ジャグジー、マッサージ治療）●ダーシャ：大変体が弱く、この1年で

3回も入院した。頭痛、低血圧。毎日血圧を測定。保養中に熱中症で頭痛が起きた。風邪気味で咳も出たが薬でよくなった。（マッサージ、岩塩治療）●オクサーナ：ほぼ毎日頭痛を訴えた。鎮痛剤。（アロマセラピー、薬草茶、炭酸乾燥サウナ）●カーチャ：ビタミン剤を服用。生まれつき皮膚の問題。●ウラディーミル：頻繁に喉の痛み（岩塩治療、吸入治療）●ナースチャ：咳が頻繁に出る。（吸引治療、マッサージ、アロマセラピー、ジャグジー）

<引率者：アレーシャ・N>（ゴメリ市の小学校の英語教師）自分はゴメリに住んでいるが、ナデジダに着いてすぐ環境のよさを実感した。普段は頭痛がひどく痛み止めが手放せないが、ここでは全くそれがなかった。娘はよく熱を出したり学校を休んだりするが、ここでは最後まで体調を崩すことはなかった。ゴメリの環境がいかによくないのかわかってしまった。あそこで子どもを住ませ続けてよいものなのかと真剣に考えた。自分の双子の姉妹（※）は子どもの頃甲状腺がんを患った。当時はその病気が多かったが、今の子どもたちの病気は様々だ。チェルノブイリ事故から29年もたっているのに、一体この子たちの病気はどこから来たものなのかと恐ろしくなる。ここは自然環境だけでなく、施設の設備と、職員の対応が素晴らしい。娘が学校から行った保養所は子ども用の催し物がほとんどなく、

## ～ ナデジダの今後について ～

設備も対応もよくなって、体調を崩して帰ってきたくらいだった。

自分の夫は放射能に全く無頓着。いくら説明しても理解しない。今の子どもたちは学校で少しは放射能のことを勉強するが、私たちの時は何も教わらなかった。身近に病気になった人でもいなければ、知らないでそのまま大人になる人も多い。夫は汚染地区の川で釣ってきた魚を自分や娘にも食べさせようとするので、それはとんでもない！と強く拒否している。彼になんとか危険性を理解させたい。今回参加した子どもたちの病気のことを話してみたいと思う。（※2012年4月に子ども基金が日本に招き、講演をしたオリガさんと双子）

<子どもの感想>■毎年参加しているので第2の自分の家に戻ってきたみたい。友だちと会えてうれしい。日本のみなさん、ありがとうございます。（ヴィーカ・14歳）■手芸教室では飾り物を作り、書道教室で漢字を書いた。仲間と参加したバレーボール大会で優勝してうれしかった。将来は医師になりたい。（ナースチャ・14歳）■保養に招待してくれた日本の皆さんに感謝します。僕はもうすぐ18歳になるのでもうこの保養には参加できません。可能なら来年自分で費用を払ってでも、子どもたちの世話係として参加したい。（ディーマ・17歳）■ジャグジー風呂は電気が点いたり音楽が流れたりして楽しかった。お医者さん、看護師さんはみんな優しい。絵を描くのも楽しかった。（ボグダン・8歳）■英語の勉強なんて意味がないと思っていたけれど、僕たちの引率者が外国のお客さんと英語で話しているのを見て、僕もそうなりたと思った。これからは英語をちゃんと勉強しようと思う。（ポーバ・15歳）■初めて参加。毎日楽しくて（特にディスコ）家を恋しがらる暇がなかった。来年もまた来たい。（マーシャ・9歳）■僕は初めて舞台の上でみんなの前でシンセサイザーを演奏した。（ルスタン・8歳）



子ども基金は、ナデジダの設立当初より運営費や、医療機器や医薬品、施設の建設費・補修費の一部、クラブ活動の道具、年間保養費の数%を支援してきた。また、毎年夏にはそこで子ども基金の保養プロジェクトを開催してきた。今年9月で設立21年を迎えたナデジダの現状と今後について、マクシンスキー所長の話を聞いた。~~~~~

ナデジダはベラルーシとドイツのNGOの共同経営による民間企業。汚染地区に住む子どもたち専用の保養所とし、ベラルーシで最初に設立した。その後、国家もこのような保養の必要性を認め、同様の保養所が国内に8か所作られました。汚染地区の学校に通っている子どもたちの保養費用は国家負担で行われている（実施率は平均して55-60%）。国の費用だけでは足りない分は、子ども基金のような外国のNGOからの支援や、2005年より一般旅行者を受け入れることによる収入などで賄ってきた。しかし旅行者用宿泊施設は、夏期はほぼ満員となるが、秋・冬は利用が少ない。そこで2005年1月より、親子の保養の受け入れを開始した。これは国のプロジェクトで（保養費用は国が負担）、子どもと引率の親が21日間（学校単位の保養は24日間）保養をするというもので、チェルノブイリ汚染地の住民に限らず、ベラルーシ全土の住民が対象。我々は1度に24家族の受け入れを開始した。

この家族保養を開始し、いくつかの部門をまとめて人員を減らしたりするなどの見直しを行った結果、2016年からは各国NGOの支援を受けずとも独立して経営できる目処がたった。これまでの子ども基金を含めた各国NGOからの支援に大変感謝している。今後も医薬品やクラブ活動の備品などの支援をいただけるのなら大変ありがたい。

来年でチェルノブイリ事故から30年だが、今後も子どもの保養は必要だと考えている。しかし国からの支援も外国からの支援も減少すると予想している。また、ナデジダから約80キロの所に原発建設が予定されている。これに対して公式には何も言うことができない。しかし我々は、独自の自然エネルギーだけで、原発なしでもやっつけられることを証明したい。薪と木のチップを原料とするボイラー発電設備を新たに建設した。更に近くの村に2.5ヘクタールの土地を得て、600kw/1日の太陽光発電をする予定。自分たちはそれにより無料で電気を得て、余った電気を国に売る計画をしている。もしこれが実現したら、ベラルーシで初めての、唯一のものとなる。資金集めのために寄付を募っている。

ベラルーシの汚染地は数年おきにモニタリングを行い、（実際の数値に則しているかどうかは別として）汚染地の指定を徐々に外している。これでいくと、国がこれまでの規模で子どもの保養を行うのは2022年くらいまで

とみている。特にその頃には、現在、多くの学校が保養に来ているゴメリが汚染地から外されると予想している。そうすると保養人数は極端に減少する。その時に備えて以下の方向を考え、実行し始めている。以下のうち1、2、6は国の予算による保養。

1. チェルノブイリ汚染地の子どもたちの保養（人数は減少しても最重要と位置付ける）
2. 親子の保養
3. 外国のNGO主催の保養プロジェクト
4. 一般旅行客の受入（独立して経営するために不可欠な収入を得るため）
5. 農業部門（環境に配慮した技術を用いる。自給自足できるように）
6. 障害のある子どもと引率の親のための保養

国内には障害のある子どもを専用に入れられる施設が一つもないことから、需要は大きいと考えた。すでに施設内の建物の一部に車いす用スロープや、車椅子で利用できるトイレ・シャワー室を設置し、NGOのプロジェクトによる障害児の保養を徐々に行っており、経験を積んできた。我々が今後、障害児の保養を受け入れることに対して国も賛成し、新たな宿泊棟の建設費用を出すことになっている。一般の子ども用・障害児用の屋内プールの建設も予定している。

<参考：2014年ナデジダでの保養の割合>

- |                |     |
|----------------|-----|
| ①汚染地区の学校単位の保養  | 65% |
| ②各国NGO主催の保養    | 14% |
| ③障害のある子どもたちの保養 | 4%  |
| ④一般の旅行客        | 17% |

## 2015年5月 家族訪問 ベラルーシ

報告 佐々木真理

### アンナ・K 2002年生まれ ゴメリ市

未分化大細胞型リンパ腫（悪性リンパ腫）。母親の話。

「2014年夏、脇の下のあたりが痛み出し検査を受けたが異常なしと診断されましたが、その後別の病院で検査を受け、10月末にミンスク市の専門病院で悪性リンパ腫と診断され手術を受けました。今もミンスク市の小児がんセンターで化学療法が続いています。治療の際には自分が付き添います。1クールごとに自宅に戻り、7-10日後にまた治療のため入院します」

（訪問時はちょうど治療の合間で帰宅しているところだった）ゴメリ市内の古い2部屋のアパートで、両親、祖父母と5人で暮らしている。アー



ニャは治療の副作用で抜けてしまった髪の毛を隠すため頭をスカーフで覆っていた。入院中に習ったという、カラーの輪ゴムで作ったブレスレットや動物の形などをたくさん見せてくれた。アーニャに必要な薬はすべて無料ではなく、時には家族が自らインターネットで外国から取り寄せている。アーニャの父親は、チェルノブイリ事故当時、ヴェトカ地区の自分の祖父母の村にいた。その村は事故後、強制移住が行われたという。

### ボグダン・K 2007年生まれ ゴメリ市

左上腕軟性組織の悪性腫瘍。祖母の話。「手術をした医師から、もう少し発見が遅れていたなら、腕が動かなくなっていたかもしれないと言われました。手術後、3か月に1回ミンスクの病院に検査を受けに行きました。今は1年に2回、血液検査やレントゲン検査など



を受けています。検査に行く時は、朝早く家を出て、結果に問題がなければ、その日のうちに家に戻ってきます。学校は家の近くです。体が弱く、数日通うとすぐどこか具合が悪くなり休む、ということを繰り返します。アレルギーがあり、そのせいで左の耳に問題が起きています。食べ物では、チョコレート、鶏肉、豚肉が食べられません。りんごは青いものだけ大丈夫です。甘いものはなるべく食べさせないようにしています。

チェルノブイリ事故から数日後のメーデーのパレードに、当時6歳の長女（ボグダンの実母）と一緒に参加し、1日中外にいました。ものすごい風が吹いたことを覚えています。娘は14歳から体中に腫れものができるようになりました。そしてボグダンが2歳の時亡くなりました。また、私の息子は手足が不自由です」ボグダンは初めて会う私に人見知りや全くせず、自分の好きな本を見せたり、一緒にゲームをしようと誘ってきたり、とても快活でした。好きな科目は、数学、文学、英語、人と世界（自然や人の体、ものの仕組みなどを学ぶ科目）。ボグダンは祖母を「ママ」と呼んでいた。部屋には亡くなった母親の写真が飾られていた。「ボグダンは最近、“お母さんがいてくれたらなあ”と言うことがあります。それを聞くと、自分の接し方が何かよくないのかしら、と不安になります」と祖母は話した。

## ニキータ・Z 1996年生まれ ゴメリ市

母親の話。「ニキータのような病気は、以前はチェルノブイリ事故と関係があるといわれていましたが、2009年12月の法改正により、そうではなくなりました。ニキータは何種類もの薬を飲んでいますが、ベラルーシ製の薬は効果がありません。ベラルーシ製の薬でも、風邪薬など簡単なものを除き、完全に無料ではありません。障害者として10%くらい割引があるくらいです。毎日飲んでいる腸の薬は1カ月分で30ドル、他の薬は1カ月分で50ドルです。病院にはまるで仕事のように通っています。外科、心臓外科、精神神経科、胃腸科、内分泌科（甲状腺に問題がある）、整形外科（カルシウム不足で背骨に問題がある）、これらのどこかにいつも通っています。ニキータは、検査に行くたびに新しい病気がみつき、昨年12月も入院しました。

18歳までは障害児（子ども）年金は121ドルでした。18歳からは障害者（成人）として扱われます。ニキータは第2級障害者で年金は95ドルです。それまで私は障害児の介護手当110ドルを受けていましたが、今後はなくなります。成人したからといってニキータは病気であることに変わりはないのに、介護はやめて働け、ということなのです。例えば、決まった時間に飲まなければならない薬がありますが、私が管理していないとニキータは飲むのを忘れてしまうのです。

ニキータの病気は、脳も、甲状腺も、みんな、チェルノブイリのせいだと思います。今、この国では病気の人がとても多いです。チェルノブイリ事故のとき、子どもだった人、その人の子どもなども。ニキータが行っていた小児がんセンターには、ベラルーシ各地から病気の子どもが来ています。夫が行っている成人がんセンターも、ものすごい患者。こんなにたくさんがん患者がいるのかと驚きます。

ニキータは化学療法の副作用でひどい吐き気が起こりました。ベラルーシ製の薬は体に合いません。自分でお金を払ってもいいから、外国製の、効き目のある薬にしてほしいです。脳の一番奥にある腫瘍は手術で取り除けず、まだ残っています。インターネットで、ドイツで特別な治療があることを知りました。でも外国での治療費は自己負担です。何かあった時、助けてくれるのは民間の慈善団体だけです。医師たちは外国での治療のための処方箋を書いてくれません。ベラルーシにはこんな病気の子がいるとか、ベラルーシではこの手術ができない、ということ、外国に知らせたくないからではないかと、私は思います。

（食べ物の放射能について気にしていますか？の質問に対して）食べ物を放射線測定所に持っていったことは一度もありません。店で売っているものは信用しています。自由市場の瓶詰などは買いません。（日本では一般の人も放射線測定器を持ち土壌の放射能を図ったりしている、という話を聞き）放射線測定器など、一度も目にしたことはありません。

郊外に菜園があり、野菜を作っています。それがないと生活できません。ニキータは食事にも制限があります。油もの、甘いもの、極端に辛いものを食べてはいけません。また、強い太陽の日差しを受けるのもダメです」

父親は鼻腔の悪性腫瘍の治療を受けていたが、腫瘍はまた大きくなってきているため、数日後には再度ミンスクの病院に行くことになっていると話した。また母親は婦人科の病気のため手術が予定されている。

両親は82年からゴメリに住んでいる。母親のラリーサは、チェルノブイリ事故後、奇妙な強風が吹いたことを覚えている、と話した。また、夏には学校からサナトリウムに行き、3ヶ月後にはまたゴメリに戻ったそうだ。

18歳までは保健省のリハビリセンターに1年に2回保養に行く権利があり、ニキータはこれまで両親のどちらかと一緒に、3回、無料で保養に行っていた。また、これまでは手術を受けた小児がんセンター（ミンスク市）に治療に行っていたが、今後はゴメリの成人用の病院に行くことになる。しかし

母親によると、ニキータは一人で病院に行くのは無理で、彼には誰かが付き添っていかなければならない。

「脳の問題のため、ニキータは記憶力がよくありません。でも自立させたいから、何か手に職をつけさせたいのです。上下水道配管工の技術を学べる専門学校に行かせたいと思っています」ニキータもその学校に行きたいと、勉強用の教科書を見せてくれた。

家族が暮らしているのは、ゴメリ市内の古いアパートです。両親のものらしい本が、部屋の中や廊下にもたくさん並んでいた。母親は心理学の専門家。「息子の介護があったため、専門を活かして働くことはできませんでした」と話した。

2年前に「希望」での保養に参加していたニキータは、おしゃべりで、屈託がなかった。今回自宅で会ったニキータは、大人になった分、自分の置かれている状況がわかってきたからなのか、病気のせいなのか、以前より口数が少なく感じた。病気の子どものいる家庭には、父親が家族を捨てて出て行ってしまったり、



母親がアルコール依存症のため子どもの世話をしない、などのケースもある。ここではニキータの両親が息子をとても大切に思っていることが救いだった。

### ダニーラ・G 2007年生まれ モーズィリ市

腎臓がん。現在もミンスクの小児がんセンターで化学療法が続いている。これまで12ブロックが終わり、さらにもう1ブロックの治療が予定されている。訪問した日は治療の合間で、自宅に戻ってきているときだった。

母親の話。「ダニーラは昨年(2014年)9月の小学校入学前の検査で、腎臓がんが発見され、手術を受けました。幼稚園の卒園式も、小学校の入学式にも出られませんでした。手術後も治療が続き、家と病院を往復する生活です。入院中は私が付き添います。病院での治療費と子どもの食事は無料です。薬も無料ですが、処方されたベラルーシ製の薬が体に合わないときには、外国製の薬を買うこともあります。付添いの親たちは食品を買ってきて自炊しています。病院への往復の二人分の交通費も大変です。私は以前、店員をしていましたが、いまはダニーラの介護のため働いていません」

ダニーラ治療の副作用で髪の毛が抜け、治療の影響で大分痩せてしまった、と母親は話した。病気になる前の写真は、もっとふっくらした様子だった。実の父親は養育費を払っておらず、何の連絡もない。義理の父親(母親の2番目の夫)はロシアに出稼ぎに行っている。ダニーラは彼を「パパ」と呼び慕っている。弟のチムール(3歳)は、生まれつき体が弱く、喘息があり、病弱な子ども専用の保育園に通っている。祖母(母方)が近所に住んでいて、よく助けてくれるという。「治療を受けている小児がんセンターには、外国からの支援でぬいぐるみや文房具などをもらえることがあります。文房具などは保管していて、学校に行けるようになったら使います」と母親は話した。



### ポリーナ・M 2005年生まれ ジロービン市

日本の里親からの支援を受けていた一人の女の子が10歳で亡くなった。

ポリーナは2006年に目の腫瘍の手術、2010年には腎臓がんの手術を受けた。その後は回復して、1度だけ「希望」の保養に参加したが、保養の数日後に体調を崩して病院に運ばれ、自宅に戻った。その後、顎の骨の肉腫が現れ、4回の手術と化学療法を受けたが、今年(2015年)2月に亡くなった。顎の腫瘍は、亡くなる前には顔と同じくらい大きくなっていったという。5月、ポリーナが所属していた慈善団体「困難の中子どもたちへ希望を」代表のポホモワさんと共に、ジロービン市郊外のお墓と、自宅を訪れた。母親はポリーナの写真を見せながらぼつりぼつりと話し始めた。「病気が見つかり治療が終わると、また次の病気。でも、いつも適切な時に治療してきたのに、どうしてこんなことになってしまったのか……。家に帰つてくると、あの子がまだそこにいるような気がして。あの子がいない生活に慣れることはできません」と涙を流



した。帰り際、ポリーナの兄が、私たちと写真を撮りたいと言った。「妹を助けてくれた人たちだから」と。(ポリーナのお墓と母親)

その後、8月にゴメリの救援団体代表のポホモワさんと会ったとき、やはり以前里親の支援を受けていた男の子(18歳)が亡くなったことを知らされた。脳腫瘍の手術を受け、治療もしてきたのだけれど、最後は助からなかった。「手術も治療も終え、よくなってきたと安心していても、再発することもある。支援してきた子どもが亡くなるのは辛く、残された家族の気持ちを考えてさらに辛くなる」と話した。

## ウクライナの青年ウラディ斯拉フへの ご支援のお願い

チェルノブイリ子ども基金では、甲状腺手術後の困窮家庭の子どもを対象に、日本の里親が月 50 ドル相当を支援する「里親制度」を、98 年より実施しています。現在は甲状腺以外の病気の子どもの対象になっています。これまでに 279 人が、現在は 66 人が里親からの支援を受けています。里親が見つかるまでの間、子ども基金の募金の中から「緊急支援」として支援することもあります。

2011 年に子ども基金が「緊急支援」をした、ウクライナの青年ウラディ斯拉フ（ジトミル州・オヴルチ市／1995 年生まれ）から、メールが届きました。彼は慢性腎機能不全のため血液透析を受けており、薬代、通院代などが重い負担になっているといいます。ウラディ斯拉フは、腎臓移植手術を希望していますが、ウクライナの病院や慈善団体に支援を訴えても援助が得られず、子ども基金に助けを求めてきました。親族は適合する人がみつからず、死体移植しか方法がないとのこと。手術費用は 60,000 ドル（約 722 万円：10/6 レート）と高額で、子ども基金の力だけではすぐに支援できるものではありません。また費用ができたとしても、臓器提供者が現れるまでは、いつ手術を受けられるかわかりません。そのため子ども基金では、せめて血液透析の治療費の一部でも支援していきたいと考えています。皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

\* = \* = \* = \* = \* = \* = \* = \* = \* = \* = \* = \* = \* = \*

「自分の病気の、解決法のない状況についてお伝えしたいと思います。以前、あなたがオヴルチの僕の家を訪問された時、僕は自分の病気について全てを理解しておらず、また、「生命」という言葉に価値を見出すことのない子どもでした。でも今はただ神様と善良な人々に祈るのみです。

僕の病気は、急性腎不全を伴う、急性腎感染症、溶血性尿毒症症候群の後の、慢性腎臓機能不全 4・5 段階です。1998 年から、チェルノブイリ事故による障害児と認定されています。1996 年から代謝疾患センター“Okhmat”（キエフ市）で治療を、2000 年から第 7 小児病院腎臓科（キエフ市）で治療を受けました。2013 年から“Okhmat”で血液透析を、現在はキエフ市第 1 小児病院で血液透析を受けています。

僕は緊急に腎臓移植をする必要があります。体調は日に日に悪くなっています。検査の結果、親類の腎臓はみな不適合でした。ウクライナでは亡くなった人からの腎臓移植が許されておらず、訪れた病院ではどこでも断られました。最後の望みはベラルーシで手術をすることです。ベラルーシ大統領に支援を願い出しました。ベラルーシ保健省からの返信でわかったことは、ミンスク市の第 9 病院で腎臓移植手術が行われているということでした。外国人の場合の手術代は 65,000 ドルです。

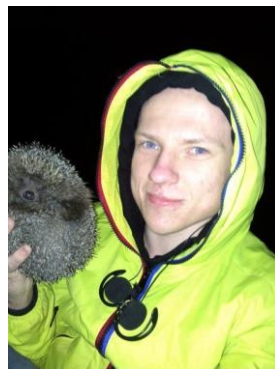
本当に悔しいことですが、僕たちにはそのような大金はありません。ベラルーシの病院で手術を受ける申請するための費用さえありません（※）。このような健康状態のため、僕は働いていません。両親は年金生活者です。このような大金を準備することは、僕たちには不可能です。僕が今、週 3 回受けている血液透析の費用に、ほとんどのお金が使われています。ウクライナは軍事的・政治的状況の困難、インフラ、経済危機にあります。この国では、自分の病気のことは自分でなんとかしろ、と見捨てられたようなものです。

どうかベラルーシで腎臓移植手術ができるように、助けてください。心からご支援をお願いします。

僕は「生きたい」のです！

ウラディ斯拉フ・ポローシ

2015 年 6 月 2 日



（※その後 5000 ドルを支払い、手術前の検査を受けました。検査では甲状腺の問題も見つかりました。）